



10年位前に重慶から3000トンの船に乗って長江を下った断崖絶壁の記憶があり、5年程前には桂林竹江から漓江と流れにのって田園風景を眺めた思い出があります。

孫や友人家族に誘われるままにまた桂林漓江へと一念発起して出かけました。成田から広州まで凡そ5時間余り乗り継いで更に50分して桂林へついたのはもう日が暮れておりました。時間差60分でした。8月22日朝10時、桂林竹江の船着場から乗船する。心配された暑さは日本を出るときよりずっと涼しい28度位でした。

定員98名、50トン位の鉄船は満席でしたが汽水線は50cmの標示が見え隠れする川底が見える浅い川でした。後でわかったことですが、この船の終点「陽朔」の船着場は水位を保つために堰止められておりました。

やがて百隻余りの船は客をのせて順次出航して川を下り始める様は「蒙古襲来」の絵図を見るような壮観なものでありました。

川幅は広いが船の通れる水路は狭くやっと一船分位である。朝、客をのせて凡そ48キロを4時間余りで終着となり、空船は夕方空いた水路を上って帰る、一方通行の仕組みが成り立っているのです。

出航すると船内は小さな市場となってビール、酒を始めとして写真帖、ペンダント、織物、木彫、石刻品、乾燥野菜類の売り込みが始まり、気がつくとも舷側にも竹筏の船をつけて窓からも猛烈な波状攻撃が始まります。謂わば中国旅行にはかかせない、「売買のショウ」であります。「売り手は少しでも高く売値を言い、買い手は値切りに値切って商売が成り立つ」。私はこの「掛け合い」が大好きです。「中国人の売値は信用できない、ずるい」と言う人もいますが、中国人の取引は交渉を大切にすることからでありますので、腹を立てないで値引き交渉を如何にじっくりと楽しむかが中国旅行のおもしろさであります。

今度の漓江下りの新発見は10年前に発見された大鍾乳洞でした。地底宮殿を思わせる壮観なものでディズニーシーはここをモデルにしたのではと思わせるように真っ暗な地底の川を船でくぐり抜けトロッコ電車で走り地上へ帰りました。

この日の宿は陽朔にオプションをして、念願だった「西街」を散策することにしました。船着場からホテルまで延々と続く露天街は人で埋まり「スリ」の多い所と言われています。しかしこの露天街は私たちのような骨董品マニアにとっては魅力満点な街です。郷土色豊かな手芸品は美しく安い品が多いが、骨董品、ブランド品は全く真贋性は分からない。私達は群をしっかりと作って集団自衛しながら買い物は共同購入して値引き交渉、まさに「丁々発止」と売買に火花を散らします。この交渉のコツは価値判断をすばやくされて交渉相手が「それではあなたはいくらで買いたい」と、切り返された時、後悔を残さない即答が出来ないと「負け」となります。

商売も国が変われば思考・方法も変わります。一つの価値、判断基準だけでなく、いくつかの基準を持つことがビジネスにおいては重要であるといえます。